

木精（三尺角拾遺）

泉鏡花

青空文庫

「あなた、冷えやしませんか。」

お柳は暗夜やみの中に悄しよんぼり然と立つて、池に臨のぞんで、その肩を並べたのである。工学士は、井桁いげたに組んだ材木の下なる端はしへ、窮きゆうくつ屈まに腰を懸かけたが、口元に近ちかちか々と吸まつた巻煙まきたば草こが燃えて、その若々しい横顔と帽子の鍰つばひろ広ひろな裏とを照らした。

お柳は男の背せなに手をのせて、弱いものいいながら遠慮えんりよげ気なく、

「あら、しつとりしてるわ、夜露よつゆが酷ひどいんだよ。直じかにそんなものに腰を掛けて、あなた冷つめたいでしよう。真ほんとに養生ようじようぶか深い方かたが、それに御病氣あげく拳句けんくだというし、悪いわねえ。」

と言つて、そつと圧おさえるようにして、

「何ともありませんか、又またぶり返すと不可いけませんわ、金きんさん。」

それでも、ものをいわなかった。

「真まとに毒どくですよ、冷えると悪いから立つていらつしやい、立つていらつしやいよ。その方まが増ましですよ。」

といいかけて、あどけない声で幽かすかに笑つた。

「ほほほほ、遠とこい処ころを引張ひっぱつて来て、草臥くたびれたでしょう。済いみませんねえ。あなたも厭いやだ

というし、それに私も、そりや様子を知つて居て、一所に苦勞をして呉れたからツたつても、姉さんには極が悪くツて、内へお連れ申すわけには行かないしき。我儘ばかり、お寝つて在らつしやつたのを、こんな処まで連れて来て置いて、坐つてお休みなさることさえ出来ないんだよ。」

お柳はいいかけて涙ぐんだようだったが、しばらくすると、

「さあ、これでもお敷きなさい、些少はたしになりますよ。さあ、」
すりよ
擦寄つた氣勢である。

「袖か、」

「お厭？」

「そんな事を、しなくツても可い。」

「可かありませんよ、冷えるもの。」

「可いよ。」

「あれ、情が強いねえ、さあ、ええ、ま、痩せてる癖に。」と向うへ突いた、男の身が浮いた下へ、片袖を敷かせると、まくれた白い腕を、膝に縋つて、お柳は吻と呼吸。

男はじつとして動かず、二人ともしばらく黙然。

やがてお柳の手がしなやかに曲^{まが}つて、男の手に触^ふれると、胸のあたりに持つて居た巻煙草は、心するともなく、放^{はな}れて、婦^{おんな}人に渡^{わた}つた。

「もう私は死ぬ処^{ところ}だったの。又笑うでしようけれども、七日ばかり何にも塩^{しお}ツ氣^けのものは頂^{たか}かないんですもの、斯^こうやつてお目に懸^かりたいと思^{おも}つて、煙草も断^たつて居^いたんですよ。何^{なに}だつて一旦^{いったん}汚^{けが}した身^{からだ}体^{たい}ですから、そりやおつしやらないでも、私^{わたし}の方^{かた}で氣^きが怯^ひけます。それにあなたも旧^{もと}と違^{ちが}つて、今^{いま}のような御身^{おみぶん}分^{ぶん}でしよう、所^{しよ}詮^{せん}叶^{かな}わないと断^{あきら}めても、断^つめられないもんですから、あなた笑^{わら}つちや厭^{いと}ですよ。」

と、いい淀^{よど}んで一寸^{ちよつと}男^{おとこ}の顔^{かほ}。

「断^つめのつくように、断^つめさして下^{くだ}さいツて、お願^{ねが}い申^ました、あの、お返^{かへ}事を、夜^よの目^めも寝^ねないで待^{まち}ツてますと、前^{まへ}刻^{さつき}下^{くだ}すつたのが、あれ……ね。

深^{ふか}川^{がわ}のこの木^き場^ばの材^ま木^きに葉^はが繁^{さか}つたら、夫^{いっしょ}婦^よになつて遣^やるツておつしやつたのね。何^{なに}うしたつて出来^{でき}そうもないことが出来^{でき}たのは、私^{わたし}の念^{ねん}が届^{とど}いたんですよ。あなた、こんな^{こんな}に思^{おも}うもの、その位^{くらい}なことはありますよ。」

と猶^{なほ}しめやかに、

「ですから、最^もう大^お威^お張^{はり}。それではなくツてはお声^{こゑ}だつて聞^きくこと^{こと}の出来^{でき}ないのが、押^お懸^{しか}

けて行つて、無理にその材木に葉の繁つた処をお目に懸けようと思つて連出して来たんです。

あなた分つたでしよう、今あの木挽小屋の前を通つて見たでしよう。疑うもんじゃありませんよ。人の思ですわ、真暗だから分らないつてお疑んなさるのは、そりや、あなたが邪慳だから、邪慳な方にや分りません。」

又黙つて俯向いた、しばらくすると顔を上げて斜めに巻煙草を差寄せて、

「あい。」

「……………」

「さあ、」

「……………」

「邪慳だねえ。」

「……………」

「ええ！、要らなきや止せ。」

というが疾いか、ケンドンに投げ出した、巻煙草の火は、ツツツと楕円形に長く中に流星の如き尾を引いたが、※と火花が散つて、蒼くして黒き水の上へ乱れて落ちた。

屹きつと見て、

「お柳、」

「え、」

「およそ世の中にお前位なことを、私にするものはない。」

と重々しく且かつ沈しんんだ調子で、男は肅しゆくぜん然ぜんとしていった。

「女房ですから、」

と立派たぢまふるに言い放ち、お柳は忽たちまふるち震ふるいつくように、岸破がばと男の膝ひざに頬ほおをつけたが、消入きえい

そんな風とりなり采さいで、

「そして同年紀おなじとしだもの。」

男はその頸うなじを抱かかこうとしたが、フト目を反そらす水の面おも、一点の火は未まだ消えないで残のこつて居たので。驚おどいて、じつと見れば、お柳が投げた巻煙草まきせんそうのそれではなく、靄もやか、霧きりか、朦朧もうろうとした、灰色の溜池ためいけに、色も稍濃ややく、筏いかだが見えて、天窗あたまの円まるい小な形ちいさが一個乗ひとつつて蹲しゃがんで居たが、煙管きせるを啣くわえたらうと思おもわれる、火の光が、ぽツちり。

又水の上を歩ある行ゆくいて来たものがある。が船ふねに居るでもなく、裾すそが水について居るでもない。脊高せたかく、霧おんねぎみと同鼠どうねずみの薄うすい法衣ころものようなものを絡まとつて、向むこうの岸かたからひらひらと。

見る間に水を離れて、すれ違つて、背後なる木納屋に立てかけた数百本の材木の中に消えた、トタンに認めたのは、緑青で塗つたような面、目の光る、口の尖つた、手足は枯木のような異人であつた。

「お柳。」と呼ぼうとしたけれども、工学士は余りのことに声が出なくつて瞳を据えた。

爾時何事とも知れず仄かにはかりがさし、池を隔てた、堤防の上の、松と松との間に、すつと立つたのが婦人の形、ト思うと細長い手を出し、此方の岸を気だるげに指招く。

学士が堪まりかねて立とうとする足許に、船が横ざまに、ひたとついで居た、爪先の乗るほどの処にあつたのを、霧が深い所為で知らなかつたのであろう、単そればかりでない。

船の胴の室に嬰兒が一人、黄色い裏をつけた、紅の四ツ身を着たのが這つて、彼の婦人の招くにつれて、船ごと引きつけらるるやうに、水の上をするすると斜めに行く。

その道筋に、夥しく沈めたる材木は、恰も手を以て掻き退ける如くに、算を乱して颯と左右に分れたのである。

それが向う岸へ着いたと思うと、四辺また濛々、空の色が少し赤味を帯びて、殊に黒ずんだ水面に、五六人の氣勢がする、囁くのが聞えた。

「お柳、」と思わず抱だきし占めた時は、浅黄あさぎの手絡てがらと、雪なす頸が、鮮やかに、狭霧さぎりの中に描えがかれたが、見る見る、色があせて、薄くなつて、ぼんやりして、一いったい体に墨すみのようになつて、やがて、幻まぼろしは手にも留とまらず。

放すきして退ると、別に堀際へいぎわに、犇ひしひし々と材木の筋すじが立つて並ぶ中に、朧おぼろ々おぼろともものこそあれ、学士は自分の影だろろうと思つたが、月は無し、且かつ我が足は地つちに釘づけになつてゐるのにも係かかわらず、影法師かげぼうしは、薄くなり、濃くなり、濃くなり、薄くなり、ふらふら動くから我にもあらず、

「お柳、」

思わず又、

「お柳、」

といつてすたすたと十間けんばかりあとを追つた。

「待て。」

あでやかな顔は目前めざきに歴ありあり々と見えて、ニツと笑すずしう涼い目の、うるんだ露つゆも手に取るばかり、手を取ろうする、と何にもない。掌たなそこさわに障さわつたのは寒い旭あさひの光線あさひで、夜はほのぼのと明けたのであつた。

学士は昨夜、礫川なるその邸で、確に寢床に入ったことを知って、あとは恰も夢のよう。今を現とも覚えぬ。唯見れば池のふちななる濡れ土を、五六寸離れて立つ霧の中に、唱名しょうみやうの聲、鈴りんの音、深川木場のお柳やなぎが姉の門かどに紛まぎれはない。然しかも面おもてを打うつ一脈いちみやくの線せん香かうの香においに、学士はハツと我われに返かへつた。何も彼かも忘れ果はてて、狂氣きやうきの如ごとく、その家やを音お信とすれて聞きくと、お柳やなぎは丁ちやうど爾そのとき時とき……。あわれ、草木くさくも、婦人おんなも、靈魂たましいに姿すがたがあるのか。

青空文庫情報

底本：「化鳥・三尺角」岩波文庫、岩波書店

2013（平成25）年11月15日第1刷発行

2015（平成27）年5月15日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日

初出：「小天地 第一巻第八号」

1901（明治34）年6月10日

※表題は底本では、「木精《こだま》（三尺角拾遺）」となっています。

※初出時の表題は「木精」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年6月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木精（三尺角拾遺）

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>